



椎名 誠

あやしい探検隊
不思議島へ
行く

角川文庫

あやしい探検隊 不思議島へ行く

椎名 誠



角川文庫 9022

平成五年七月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五—
営業部(〇三)三八一七—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

あやしい探検隊
不思議島へ行く

椎名 誠

角川文庫 9022

目次

与那国島	シケの東シナ海でカジキマグロに偏愛する	七
瓢箪島	うけつけ、と泡だち海ボウズが夜更けに笑う	四二
由利島	公衆電話をやブ蚊が守る怪しの無人島	六三
猿島	オシルコ波のむこうに浮かぶ「サルではなくてネコ」の島	八三
浮島	ゴーマン・ハラダちお説教島の夜は更けない	一〇三
スリランカ（その1）	ニッポン日和見カレーあかつきに玉砕す	一二二
スリランカ（その2）	ラッキョ飯面の凶器攻撃について	一五五
モルジブ	南海の楽園にカツオブシ島があった	一九一
竹生島	カメラでめざしたドンブリ島	二三五
イソモシリ島	北の果ての無人島でカニ鍋を食う	二六二
単行本版あとがき		二九七

不思議島をめぐる人々——其之1

木村晋介——焚火大酒宴前座真打ち系竹管弦音声係。最近は本職の弁護士よりDJで活躍。



太田トクヤ——ところかまわず寝てしまふ焚火料理味付け怪人。新宿で酒場を経営。



ヨロズ世話人のイノさん●猪口修道——派乗員兼ドレイ手配師兼生ビール捜査員。異常辛口偏愛者である。



沢野ひとし——東ケト会初代炊事班長。『今度は行くよ』と言いつつ六本木の夜の海を泳いで去った。この本のイラストを担当。



松坂實——ナマズと聞けば世界の大河小川に急行。容貌がいつしかナマズに似てきた大酒豪。



カヌー犬ガク——野田さんの犬でカヌーに乗るのを生きがいとしている。



ヨネちゃん●米藤俊明——東ケト会随一の力持ちにしてデカフライパンとダジャレの名手。ドレイながら平和な家庭を築く。会社員。



カメラの山さん●山本皓——世界どこでもさすらいカメラマン。東ケト会唯一一人の下戸である。



依田セーネン●依田正晴——東ケト会旧雑役係。得意技笛吹きをやめ、恐怖の殺人技・ガスボンベ投入瞬間豪華焚火術を完成。



陰気な小安●小安穂一——東ケト会の事務局長。全国津々浦々に隠れファンを持つが、彼は黙々と釣れない哲学的な釣りに没頭する。



野田知佑——男は身ひとつで生きべきだと、カヌーに積める物を乗せ世界の川を漕ぎ回る。カヌーイスト。



不思議島をめぐる人々——其之2

大男の漁師——北海道・歯舞の漁師。イソモシリ島に渡してくれた。



ドレイB●辻勝博——快眠大暴飲食を得意技とする消費型ドレイ。学生。



ドレイの沢田●沢田康彦——横須賀の薪木はドフ板通りのドフ板だと、妙に気転のきく非力ファッショナブルドレイ。雑誌編集者。



ウゲゲのヤギ——瓢箪島の親子連れの先住民。自然食を愛し、我々のキャベツにそっぽを向いた。



ドレイのタロー●日向寺太郎——東ケト会初の突如的志願ドレイ。試練の琵琶湖合宿を生きのびる。



ドレイのゼンジ●上原善二——卒論代わりにガリ刷り本を企画したが挫折、本の雑誌社に入る。



ダブダブ運転手——与那国気三台のタクシーの一台を運転する。家を継ぐため古屋から帰島。島



置き去りの船頭——瓢箪島に渡してくれた旅館経営者。約束の時間に現われず、我々を青くさせた。



ヨタヨタヨットの船長——東南アジアを快走した腕前もオシルコ東京湾では勝手が違い完走断念。



アブダガリム——モルジブのカツオ一本釣り船の船長。昼寝しながらカツオを待つ悠長な漁法を守る。



金城勉——与那国島の一本釣りカジキ漁師。一年の大半を東シナ海でカジキを追う。



ドレイA●大橋幸久——難易度迫力ゼロの焚火飛び越しの凡技を習得。学生。



不思議島をめぐる人々——其之3

二本歯船長——由利島に渡してく
れた漁師。三原色カラフルの派手
な女房を持つ。



サファリア・ババ——Mr.ババの兄
嫁。日本カレー攻撃を中年太目な
がら足包丁で巧妙にかわした。



象使いの少年——巨大象を意のま
まに操り、我々を乗せてくれた。
翌日、キャンディへ象にまたがり
走り去った。



カマキリ老人——キャンディのト
タン板見世物小屋主兼プロデュー
サー兼音楽係。ラッキョ飯面の父
親。



スリバラ——スリランカのタワシ
ヒゲガイド。インドの嫌いな仏教
徒でもある。



浮島の海女——最低最悪ゴーマン
島で、やさしい笑顔でアワビを分
けてくれた。



ラッキョ飯面——キャンディの見
世物小屋花形唯一のスター。上げ
底墓穴からの蘇生術が必殺技。



人間魚探——アブドガリム船長の
下で働く彼は、海に潜って魚群を
探るのが仕事だ。



モルジブのキセルオババ——赤道
の昼下がり。漁師島。男はいない
よとやり手オババはプカプカとあ
やすく手招きした。



Mr.ババ——コロンボの宝石商。断
食月になると来日し、東京の夜を
満喫する回教徒。



救護隊の少女——ペラヘラ祭り
で象に踏みつぶされた人間を看護す
るのが役目のハイスクール生。



椎名誠——豊富な真水があっても
海水で野菜を洗えどドレイたちを
叱咤する東ケト会永久保存の隊長。
この本の書き手である。



与那国島
(沖縄県)

シケの東シナ海でカジキマグロに偏愛する

日本のいちばんはずれ、というところが気になり出したのは外国で「国境」というものを始めて見た頃からだった。

日本の国境は果たしてどのようなになっているのであろうか——という素朴な興味にしばしココロをあそびせてみた。しかしすこし研究してみると島国日本の国境はいたるところ“海”の上であり、目に見える国境線などというものは存在していない、ということがわかった。なんだつまらない、というかなんとなくよかったというか、ハンパではない、というか、いろいろの思いにとらわれながら、しからば国境に接している場所、日本のいちばんはずれの土地はどうなっているのだろうか——と考えていったわけである。

北のはずれ、北海道の宗谷岬に立ってみたことがある。では次は南のはずれである。

日本の最南端は波照間島^{はてるま}である、というのがわかった。しかし地図を見ると大きく弓なりになった南西諸島のもっともハズレのあたりにあるのが日本最西端与那国島^{やなぐに}であった。そしてさらにその紹介パンフレットを見ると「台湾の見える島」と書いてある。しかも台湾と与那国島のちょうど真ん中あたりに赤い一点鎖線が引かれてあって、そいつがどうや

ら「噂^{うわさ}の国境線」ということになるようであった。まあ別に誰も噂しているわけではないが、しかしそうなのである。

「国境線と外国の見える島」

「いいではないですか！」と、おれはヨロズ世話人のイノさんに言った。

「いいようですか？」

「いいいい」と、おれは言った。何か具体的にどう「いい」のかおれ自身もよくわからな
いのだが、しかしいいものはいいのだ。そこで、

「与那国島に行って台湾とか国境のある海を眺め、できれば何かそこでいろんなことを考
えるツアー」というのが即座に結成された。

メンバーはおれとイノさんとそれにカメラマンの山さんである。三人とも年齢はほぼ同
じ。酒と女の好みは違うが三人とも何でも食えるし何処^{どこ}にでも寝られる、という股旅^{またたび}第一
必須条件を満たす共通項をもっている。したがって話がまとまって出発したのはあつとい
う間であった。

与那国島に行くには羽田からまず沖縄の那覇まで飛び、そこから南西航空で石垣島まで
行き、さらにそこで、別の軽飛行機に乗りかえてようやく与那国島に到着、ということに
なる。この三回の飛行の前後にからむ手続きの時間や乗りかえ待ち合わせの時間を入れる

となんと一日では行ききれないのだ。国内旅行でありながら飛行機を使って一泊二日の日程が必要、というのになにかいかにもさいはてへの旅のようで狭い狭いとはいいいながら、日本もけっこうやるときはやるのだ。

五月十一日の夕刻、おれたちは那覇空港で合流した。

その日おれたちが進めるのは石垣島までで、その日は石垣島に一泊し、翌朝早く与那国島に飛ぶことになった。さて石垣島に着くと、港のそばのなんだか南の島にしては陰気な気配のするホテルのカウンターでおれたちはちょっとした発見をした。知らなかったのだが、沖縄からこの石垣島を経由して台湾までのフネの定期航路があったのだ。那覇―宮古―石垣―基隆（台湾）という寄港ルートで玉龍という六千トンの船が週一回就航しており、那覇からだ台湾まで三十二時間、一万七千円（エコノミークラス）で行ける。石垣島でその出国手続きができる、という話であった。一万七千円で立派な外国航路の旅を楽しめる、というわけなのである。

「いつもどのくらい乗ってますか？」とおれはホテルのフロントの男に聞いた。

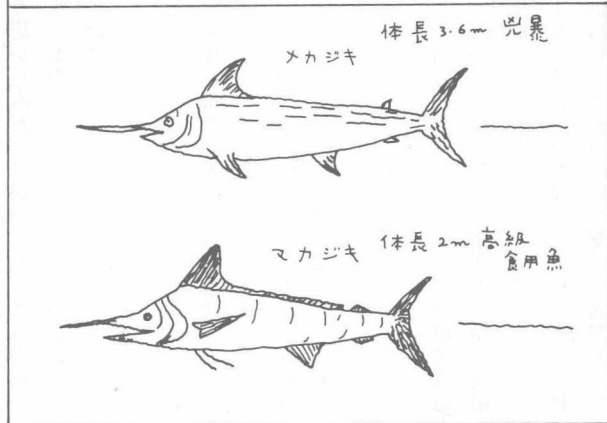
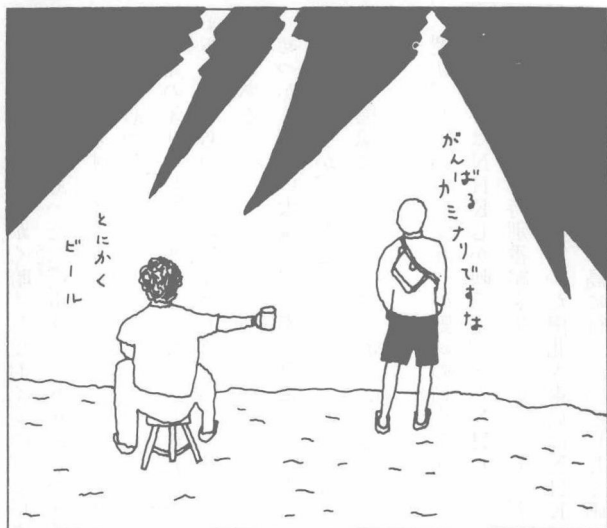
「そうすねー、まあ三十人から四十人ってとこじゃないすかあ。船は二百五十人乗れるんすけどねー」と陰気なホテルのフロントの男はひくい声でやはり陰気に言った。二百五十人乗りの船に三十〜四十人というとなんだかうらぶれの国外逃亡という気配がしないでも

ない。

ま、しかし我々とはかく南の島に来たんだから明るく夕食を食いにいこう、というこ
とになった。ついでにカセットテープレコーダーのヘッドホンがほしかったのでフロント
の男に電気屋の場所を聞いたら歩いて十分ぐらいかかる、という。じゃあ面倒だからいい
や、と思ってあてずっぽうに歩いていくと、ホテルを出て一分もしないうちに立派な電気
店にぶつかった。どうなっておるのだ。

ヘッドホンを買うと、店のおばちゃんが「テープはいらんのか？」と聞いた。見ると歌
の入っているカセットテープが二百五十円均一で売っている。「これはずいぶん安いなあ」と
イノさんがおどろくと、店のおばちゃんは「だけど歌っているのはよくわからん人ばっ
かさあ」と言った。見ると結木かおりとか南条孝太郎とかザンボラザーズとかほんとう
によくわからん人ばかりだった。よくわからん人のカセットテープ一本二百五十円とい
うのは果たして安いか高いか、というようなことを議論しながらなおも歩いていくと、ス
テーキハウス石垣島という看板の店が見つかった。

「それではまあとりあえずステーキに生ビールでも……」と言いつつ店の中に入っていく
と、これがどういふわけなのか黒い壁と黒い天井のめったやたらと暗い店で、テーブルに
ついててもメニューがあまりよく見えないくらいなのだ。どうもこの店の主人かなにかが高



級レストランはとにかく暗くしておくもの、という思い込みがつよいらしく、天井からのランプもむかしあった二燭電球にしようくというかんじの赤暗いものがボウッとともっているだけで客は誰もおらずなんだか高級ムードというよりもひたすらぼんやりうすらさびしいというムードであった。

地元のオリオンビールをのみたかったのだがなぜかキンビールしかなく、ステーキはまあまあであったがめしはベチャライスで、どうも全体にこの店も陰気な気配にみちているのである。

せっかく明るい太陽と風の南の島にやってきたというのにこれはいったいどういうわけなのであろうか、などとつぶやきつつなんとなく我々も背中を丸めて陰気にホテルに戻りそのまま陰気にねむってしまった。

翌朝、おきぬけにゆうべの野球の結果が知りたくて百円投入式有料テレビをつけてみると、ここではNHKしか映らず、そのNHKはなんだかけたたましく「南北大東島に衛星放送開始」という特別番組をやっていた。静止衛星からの放送開始によってこれまでテレビを見ることができなかった南北大東島にNHKTVの放送がはじまる、というのでNHKの人々が大挙してこの島に行っているらしく画面はいささかコーフン気味のNHKのア

ナウンサーが早口でいろんなことを喋^{しゃべ}っていた。

「朝六時の放送開始を前に、待ちきれない島の人々がみんな早おきして続々とここに集まってきております」というコーフン声のむこうに力道山プロレスの時代を思わせるような巨大な街頭テレビを見つめる島民の姿が映っている。

「この島ではこれから数々の衛星放送開始を記念するおまつりが行なわれます。島の人はこの日のためにさまざまな踊りの稽古^{けいこ}にはげんできました……」

NHKのアナウンサーはこんな調子でいつまでもずっとこのおまつり騒ぎを放送していつとも他のニュースはやらないのだ。仕方がないのでシャワーを浴び、空港に向かう準備をはじめた。

その日、石垣島の空はきちんと晴れていた。与那国島に行く飛行機はDHC-6ツインオターである。

「この飛行機はですね。デハビランドカナダ社が作ったもので、十九人乗り、乗員三名。長さはジャンボ機の五分の一。滑走路は約三四〇メートルぐらいでOKというたいへん小回りの利く機動力をもった名機なのです」とイノさんが安全ベルトをしめながら突如として交通公社のヒトみたいなことを言いはじめたのでおれはおどろいてしまった。

数字を憶える能力がまったくないおれはむかしからひとつの会話の中に三つ以上の数字